

「はままつ演劇フェスティバル 2024」劇評

蔭山ひさ枝

【フェス全体に関して】

まず、このようなフェスティバルが続いていること、そして公演を観に行くところの前出演していた別の劇団の俳優さん達が当日スタッフとして働いていることが、とても素敵だなと思いました。もちろんスタッフの方も。

浜松の演劇人の横のつながりの強さが、作品の魅力にも繋がっていると感じました。

そんな「はままつ演劇フェスティバル 2024」の劇評を担当させていただけることを光栄に思うと同時に、わたしは評論家ではなく俳優なので、俳優目線の「劇評のようなもの」になっているかと思います。

しっかりした劇評でないのを申し訳なく思う気持ちもありますが、皆さんの今後の活動の中で少しでも役立つものになればと思いながら、書かせていただきます。

【MUNA-POCKET COFEE HOUSE】紙。

11月17日(日)14時Aチーム、演出トーク、17時Bチーム

完全ダブルキャストの公演を、両チーム観ることがまず初めてでした。

それぞれの味があって、それぞれ俳優の持ち味を生かす演出だったと思いました。

作品としては、「今、上演する意味」を一番強く感じました。個人的には以前「紙」のWSに参加したこともあり、特に強く感じたかもしれません。

しゃべってから、物語ができて進んでいくような展開に、ドキドキワクワクしながら観劇しました。順番に明かされていく関係性がとても面白かったです。

演出トークや、コーヒーの販売等、観劇に来たら最後まで楽しめる仕掛けがあったのもよかったです。

演出トークでは、「俳優を安定させないための仕掛けをたくさん入れている」という話が印象的でした。俳優としては怖すぎる！でも、そこがこの作品というか、ムナポケさんの魅力の一つなんだなと感じました。「ホームランしか狙ってない」というのも衝撃的でした。

全員ダブルキャストということで、「比べちゃうんじゃないかな～」と観る前は思っていたのですが、はっきり言って全然別の作品として楽しめました。

俳優の持ち味による部分も大きいけれど、そこを台本と構成でうまく料理している、というか、「上手い」「下手」という物差しでは計りきれない仕組みになっていて、これだけたくさんの方が出る舞台をずっとやられている蓄積があるんだなとあらためて感じました。紙飛行機を作って投げ込む演出も、秀逸でした。そんなつもりじゃないのに加害者側に加担してしまう恐ろしさを感じました。

ラストシーンの、2人がゆっくり手を取って走るシーンがとても印象的でした。大変な状況なのに、少し幸せそうで、でもやっぱりそのまま幸せというわけにはいかなくて。

この胸がギュッとなる感じは、演劇が一番得意なことかもしれないと思いました。

それを余すところなくやってくれた、この作品は、わたしの観劇欲をしっかり満たしてくれました。

最優秀賞に、「紙。」に1票入れました。

どの作品も素晴らしく、また物差しが違いすぎて比べて選ぶことは困難でしたが、「今、上演すべき作品」という物差しで決めました。

【劇団からっかぜ】切り子たちの秋

12月1日(日)14時 @浜松市勤労会館Uホール

わたし個人はいわゆる「リアリズム演劇」「新劇」と呼ばれるものについて、あまり語る言葉を持っていないのですが、しっかり骨太な作品を観させていただきました。

「新劇」(と呼んでいいかわかりませんが、わたしにはそう見えました)を観る時、わたしは「不自然さのなさ」を一番大事に、舞台を観ます。からっかぜさんの舞台はこの「不自然さのなさ」という点で、素晴らしかったです。

どんなに俳優の方が頑張っている、わたしにとって、舞台美術が「揺れてしまう」と、一気に興味がなくなってしまうのですが、どんなにドアを開け閉めしても、小上がりにも上がっても、舞台美術はびくともしなくて、そこにとても感動しました。もしかするとからっかぜの方達にとってそれは「当たり前のこと」なのかもしれません。が、それは全然「当たり前のこと」ではない、とわたしは思っていて、そこに劇団の歴史を強く感じました。

それは、衣装、音響、照明、その他スタッフワークに関しても同じで、それによって「お芝居に集中できる」環境を作ってくれている、そう思いました。さすが、としか言いようがないです。

その中で、俳優さんも伸び伸びと、そして過不足なくお芝居をされているのが印象的でした。

冒頭、居間の電話が鳴って、履き物を脱がずに膝で歩いて電話を取った瞬間に、50年前にタイムスリップできました。

話としては、下町の工場の存続と、家族の話、と言ってしまうとよくある話のようですが、しっかり裏打ちされた人物と背景によって、一緒にドキドキしたり、切なくなったり、あっという間にクライマックスになったように感じました。

最後、伸吉が幸子にプロポーズするところはちょっとご都合主義な感じもしましたが、その後で母親達が2人で自分の幸せのために乾杯するところがとても素敵でした。

50年経ってもわたしたちはまだ、自分の幸せを一番に考えることに後ろめたさを感じることもあると思います。でも「自分の幸せを考えていいんだよ」「こうした方がいい、こうしないといけない、と考えすぎずに、やりたいことやっていいんだよ」と言ってもらえた気がします。そういう作品をこのクオリティで上演してくれる団体が、静岡県に存在していることが、とてもうれしいです。

【演劇ユニット FOXWORKS】MAGICIAN'S WORTH

12月8日(日)15時 @浜松市勤労会館Uホール

まずは、このチャレンジに拍手をしたいです。

マジックを舞台でやるのは、なかなかハードルが高いですが、そこに果敢に取り組んでいったと思います。

手元が見えないと伝わらない点を、映像で補おうというチャレンジは、後方の席だと少し伝わらなかったのですが、これは会場(ホールの広さ)の問題かなと思いました。

このフェスで会場をどう決めるのかがわからないのですが、もう少し小さな会場でやるか、見切れの問題はあると思うのですがあえて半分より前の席のみに観客を座らせる等の工夫があれば、もっと集中して観ることができたかもしれません。

マジック描写に関しては少し集中力の維持が難しかったですが、芝居に関してはそれぞれのキャラクターがわかりやすく、またプロローグによって一瞬でフィクションの世界に飛び込めました。あのプロローグがなかったら、本編の演技自体は少しキャラキャラしすぎていたかもしれないけれど、そこが気にならずに楽しめました。

美術の抽象性も、途中観客が舞台上に上がってしまう違和感も、全てが気にならないくらい、プロローグの存在が効いていました。

オープニングの映像も良かったです。スクリーンの昇降含めて。これも本編の雰囲気に入り込む仕掛けになっていて、とても効果的でした。ただ、わたしの座った席の問題かもしれませんが、音響のボリュームが少し小さく感じました。あの世界観ならやはり包み込まれるくらいの爆音で音響は聴きたいかな？と思います。ホールだし、もう少し音量的に出せたら良かったのかもしれない。

観客を楽しませたい！という気持ちがたくさん散りばめられていて、仕掛けもたくさんで、みなさんがエンターテイメントとしてこの作品を成立させようとしているのがよく伝わってきました。参加席も、文庫本を観客から借りる演出も、アシスタントを観客から選ぶというのも、飽きさせない仕掛けになっていたと思います。

俳優の皆さんがマジックに取り組んでいたのもすごいなと思いました。少し披露するときには声が小さくなってしまう方もいたのが残念ですが、みなさんのチャレンジには拍手を送りたいです。

エンディングもオシャレでよかったです。

全体として、しっかりまとまっていて、きちんとエンターテイメントとして楽しめました。

【シニア劇団浪漫座】翔んで浜松

12月15日(日)14時 @なゆた浜北ホール

シニア劇団の舞台ということのを忘れる、いい舞台でした。

まずはシニア劇団なのに「学園もの」ということでびっくり！みなさん、派手なかつらを被っての登場で再びびっくり！でもそんなことはどうでもよくなるくらい、エネルギッシュな舞台でした。

舞台セットは段だけでしたが、派手な衣装が映えて良かったと思います。

「オイっす！」のコールアンドレスポンスで始まった時は、ちょっとだけ「ついていけるかな？」と不安になりましたが、初めてのわたしでも楽しめる内容になっていました。

年季の入った遠州弁は嫌味な感じもなく、わかりにくくなりすぎないようになっていて、また静岡の東・中・西部の地域差？意識の差？みたいなものが面白く取り入れられていました。浜松あるあるは、全部は知らなかったけれど、なんとなくどの地方でもある「あるあるネタ」に昇華されていて、わからないながらも楽しく聞けました。

わたしは中部在住ですが、不快にならない程度のイジりはむしろ心地よかったです。

パンフレットが参加型のアイテムになっていたのも面白かったです。西部と中部の対立かと思いきや、伊豆も加わっての三つ巴、パンフもさりげなく3色になっていて「やられた〜！」という感じ。

また、それぞれのギャグや自慢がプロジェクターで映し出され、視覚的にもわかりやすい演出は、静岡県のことを知らない人が観ても楽しめるし、知っている人は「そうそう！」とより身近に、というか自分の住んでいる街をあらためて好きになれる演出だと思いました。

途中、ダンサーの方達が出てきたり、団歌？を歌ったり。たくさんの方が関わっていて、それぞれの人が「シニア劇団浪漫座」を愛しているんだな〜と思いました。

こんなに愛される劇団って、少ないんじゃないかな？と思います。劇団員の方が一生懸命活動されている、楽しそうに活動されていることが、その理由なのかな？と思いながら、最後まで楽しく観劇しました。

これからたくさんの人に観てもらいたい劇団が増えました。